

「早期胃癌 X 線診断 撮影法と読影の実戦ノート—ポイント 100」

社会保険中央総合病院消化器科部長 浜田 勉 著

放射線科新野病院

新 野 稔

順天堂大学名誉教授、故白壁彦夫先生の教え子である浜田勉氏による本書は、筆者がこれまで手にした他の実践書に比較しても今までにない充実した内容が盛り込まれている。主題は『早期胃癌の見逃しをいかになくすか—X 線写真の撮影法と読影法』である。その内容については後述するが、227 頁という手頃な厚さの本にしては驚くべき豊富な事例が含まれている。著者の早期胃癌の X 線診断に対する基本的考え方、具体的症例がコンパクトな中に余さず述べられている。

本書を読む場合、読者は具体的内容—本文から読み始められるより、最初は「はじめに」「あとがき」および最終のノート・ポイントである「胃癌の自然史からみた検査の位置づけ」から読まれてはいかかであろうか。そこには著者が本書を執筆するにあたっての基本的考え方、読み進むうえでの道標とも言うべき事柄が極めて明瞭に述べられており、本書の利用方法とでも言うべきことが述べられている。わが国の胃 X 線診断は、粘膜法・二重造影法・充盈法・圧迫法、以上 4 法の組み合わせの中で進展してきたことは読者の先生方には既知のことであろう。特に二重造影法の開発・導入は早期胃癌を発見するための検査体系確立のうえで大きく寄与するものであった。そのような中で本書の著者は、X 線検査の特性から次のような考え方を示している。

X 線造影法は機械で測定したり、正常値・異常値で判別するものではなく、様々なバリエーションを持つ

た患者個々に対する画像検査であること、バリウムの付着度合いも含めて撮影・読影のうえで部位的な困難さが伴わざるを得ないこと、更には人為的作業であることに伴う技量の差が大きく撮影・診断を左右することなど、ルーチンの X 線撮影・診断に伴う困難性や問題点を整理し、そのうえで著者自身が直接経験した症例に沿って解説したいというものである。そのためには、あえて見逃した症例や描出不良な症例、更には逆追跡できた経過観察症例も含めて、読者も共に考えることができるように項目立てで解説されているのである。本書を読めば、教科書や入門書の枠を越えて本当の意味で“実戦”の書であるとの読後感を持たれるに違いないと思うゆえんである。

著者によれば本書出版の構想から完成まで 7 年を要したとのことである。その間“癌を見逃さない日常の X 線検査—ルーチン X 線検査で救命しうる胃癌をいかに診断するか”を最も大事にして日常臨床を行ってきた著者は、その経験から極めて重要な点を 100 の戦略ポイントに絞り解説している。すなわち、100 個のノートで問題提起を行い、それに対する 100 個のポイントで結論する。また各症例の撮影・診断の要点を過不足なく“まとめ”で呈示する。実にこれらの事項記載は evidence-based medicine (実証に基づいた医療) の成果であり著者の言う“実戦ノート”にふさわしいものである。ポイント記載の仕方も才知に富み、解説は一切のむだを排したものになっている。

著者は“ルーチン検査時に IIc を

3 例見つけたら一人前”という 1 つの目標を掲げることを提唱している。そして究極のところ“X 線検査は技術である”と言い切っている。しかし当然にも、著者が言いたいのは、このためには本書で述べられているような、最低 100 のポイントは踏まえておかなければならないのである。また読者が行う検査の際、眼前の X 線写真と本書の X 線写真とを見比べて比較する手法をとることができるという意味合いで、本書は技術評価の面でも意義の深いものになっている。技術の向上は診断能の向上に結びつく。筆者の同門である“葆光会”の伝統的言葉として“確かに X 線写真に写っていないものを見ることはできない。しかし知識として蓄えたもの、知っているものを X 線写真の中に探すことが重要である。そうすれば知っているものについて見るができるようになる”というものがある。まさに本書は、この“知識として知っておくべきもの、そのポイント”を十分教えてくれるものである。

以上述べたように、本書は X 線診断に関わるすべての医師・診療放射線技師にとって必要なことすべてが書かれており、極めて示唆と含蓄に富む内容が盛り込まれた書籍である。その意味で、日常臨床の現場で文字どおり座右の書として手にすべき必読の良書であることを述べ、推薦の言葉としたい。

● B5 頁 240 図 45 写真 329
カラー写真 3 1997 定価 (本体 6,000 円 + 税) 円 400

医学書院 刊 (☎ 03-3817-5657)

□ お詫び □

小社発行の「胃と腸」1997年8月号(第32巻9号)に掲載された新野稔先生ご執筆の書評は、当編集部で不用意に、原文にない表現も付け加えお原稿の手直しをし、筆者の新野先生のご了解・ご校閲を得ないまま印刷・発行されたものです。この書評掲載に際し、当方の初歩的な誤りにより、筆者の意図することと異なる表現となり、多大なご迷惑をお掛けしてしまいましたことを著者の浜田勉先生と筆者の新野稔先生に深くお詫び申し上げます。

医学書籍編集部・「胃と腸」編集室